様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０８５１

研究課題名（和文）１９世紀イギリスの植民地間ヒト移動と帝国ネットワークの形成

研究課題名（英文）Cross-Colonial Movements of People and the Formation of Intra-Imperial Networks in the Nineteenth Century British Empire

研究代表者
吉村　真美（森本真美）（MORIMOTO-YOSHIMURA, Mami）

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：８０２６３１７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は19世紀イギリス帝国における帝国植民地間のヒト(人間)移動の検証から、ヒトおよびそのコミュニケーションの連鎖と循環で形成されるネットワークと、諸制度や文化、思想への影響の解明に取り組んだ。具体的な対象としては、北米への子ども移民、東西インドでの女性宣教師の活動、インド植民地政策と植民地主義を扱った。
その結果判明した(1)ヒト移動およびネットワークの多様性・重層性と顕著な活発さ、(2)ヒト移動にともなう植民地経験や諸制度、文化および思想の伝搬という現象の存在とその重要性、(3)これらの動態の帝国の枠をも超える高い越境性、という特色は、間帝国的視角からの帝国史研究に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to analyse the patterns of the movement of human and their intra-imperial networks in the 19th century Britain, and to examine its effects to the local social systems, cultures and ideas. To approach this theme, we deal some specific issues, such as the child migration movements to North America, the women's missionary in East-West Indies, and the British colonial policies and in India.
The conclusions are as follows: 1) The outstanding activeness of the movements of human, and overlapping and multiplexed character of the intra-imperial connections and networks they had formed; 2) Verified transmission of their colonial experiences, social systems, cultures, ideas; 3) and the cross-imperial character of these movements and activities. These results will contribute to further advance of the studies of British imperial history, recently paying much attention to the 'trans-imperial' aspects of the empires of the modern world.

研究分野：イギリス近代史、イギリス社会史

キーワード：イギリス　帝国　移民　植民地主義　国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

(1)　イギリス帝国史研究は、J・A・ホブソンやレーニンの帝国主義論を嚆矢として、自由貿易帝国主義論や周辺理論、ジェントルマン資本主義論の提起、マンチェスタ大学帝国史研究シリーズの刊行など、20 世紀初頭以降の西欧近代史研究の中でも際立って活況を呈している領域である。ことにわが国においては、国際的に評価を受ける成果も続々と生み出されており、その結果、学界の内外で長らく影響力を保ってきた「島国」の一国史的通史としての古典的なイギリス史像を、いまや完全に転換させ、「帝国イギリス」としての認識を広く得るにいたった。

　しかしながら、このような新しい潮流にあって、いまだその大前提であり続けているのが、帝国＝本国の植民地支配という「タテ」の支配関係を基軸とした帝国理解である。帝国史の創始とともに当然視されてきたこの構図のために、多くの研究がさまざまなアプローチを試みつつも、結局のところ本国と植民地の支配―被支配ないし従属という権力の構図を裏付ける、意外性を欠いた傍証的な結論にもっぱら帰結しているのが現状である。

(2)　研究代表者は当初社会史の視点から、青少年非行や犯罪、貧困といった 19 世紀イギリスの「国内問題」を扱ってきたが、このような問題が同時代においては帝国的視野で把握され、解決策が模索されたという結論にいたって帝国史への関心を深めた。経済・金融や人種問題、伝道活動などさまざまな方面から帝国史に取り組んでいた本課題メンバーとの交流の中で、意見の一致を見るようになったのが、この旧来の帝国理解を根本的に再考する必要性であった。そこで平成 21 年春に共同研究チームを立ち上げ、以来年数回の研究会を開いて国内外の学界動向などの情報や個々の研究にもとづく意見の交換、注目すべき海外研究の紹介などの活動を着実に積み重ねたうえで、研究費申請にいたった。

２．研究の目的

(1)　本研究の目的は、19 世紀イギリス帝国における帝国植民地間のヒト（人間）移動の精査な検証から、ヒトおよびそのコミュニケーションの連鎖と循環で形成される帝国規模のネットワークと、諸制度や文化、思想へのその影響を明らかにして、イギリス帝国の構造と様態を、従来にはなかった新たな視角から解明・探究することであった。

(2)　具体的には、当該期間中に以下の 3 点の究明を目的とした。
①　各メンバーが担当する地域およびテーマに関連する資料から同地を中心とするヒト移動を検証し、そこに構築されたネットワークの構成と様態を明らかにする。
②　個々の中間報告とデータの相互交換によって、複数の植民地にまたがるヒト移動とそのネットワークの連鎖、およびこれらを包摂するイギリス帝国の横断的構造を解明する。
③　アジア移民史をはじめとするイギリス以外のヒト移動研究との連携によって、近代世界におけるヒト移動とその影響についての新たな展望の可能性を模索する。

　③が示すように、本課題は、イギリス帝国史としての枠組みは堅持しつつも、当初からこれを越えた展開を予見し、アジアをはじめとする帝国版図外の地域を視野に入れていたことが特色である。

３．研究の方法

(1)　本研究は、広大なイギリス帝国におけるヒト移動とそのネットワークの解明が目的であるため、以下のような研究計画・方法で目標の達成をめざした。
①　研究代表者および研究分担者・連携研究者は、担当の地域・テーマについて英国国立公文書館などの海外機関で資料収集を行い、ヒト移動情報のデータベース化と分析を進める。
②　中間成果報告の情報共有によって、帝国全体のヒト・ネットワークの描出を進める。
③　最終年度には分担研究を総括し、公開研究会でその成果を公表するとともに、関連領域の研究者の知見を得ることで、さらなる展開と貢献の可能性をさぐる。

(2)　19 世紀イギリス帝国の特徴として、ヒトの移動範囲はきわめて広範囲におよぶ。そのため地域及び対象集団については、以下のような分担体制をとって、各自資料の収集と分析を進めた。
①吉村（森本）真美(研究代表者)―子ども移民と軍リクルート―カナダ、ケープ、西オーストラリア
②川村朋貴(研究分担者　平成 24 年 11 月に辞退)―インド人囚人の強制移送制度―インド、シンガポール、ペナン
③中沢（並河）葉子(研究分担者)―女子教育と人種観―インド、カナダ、ナイジェリア
④水谷　智(連携研究者　26 年度から研究分担者)―現地エリートの高等教育政策―エジプト、インド、ナイジェリア

　なお、初年度中途でインド担当の川村が研究分担者の任を辞したため、平成 26 年度から連携研究者の水谷が研究分担者としてインド研究をカバーした。

４．研究成果

（1）　各メンバーの各担当領域について、それぞれ以下のことが明らかになった。

①　北米、オーストラリアへの子ども移民について、17 世紀のヴァージニア移民から世紀転換期における子ども移民運動期の活動にいたるこのシステムの構造を解明し、その変遷を検証した。結果、現地の農業労働力や商船員および海兵の確保と戦略的配置という人的資源としての子ども自身の移動だけではなく、この帝国規模のチャリティのシステム、および人的ネットワークを駆使しつつ、これを推進した社会改革家の移動を伴ったこともきわめて重要であるとの結論にいたった。
　また、そのプロジェクトにおいて子どもが移動した以外の帝国植民地や、さらには諸外国における同種の活動との連携も積極的に行われ、子ども移民のシステムは時期と場所を移して移植・応用されていることもわかった。
②　女性宣教師の西インドおよび東インドにおける活動の実態について、東洋女性教育協会の史料を分析した結果、彼女たちの非ヨーロッパ世界における移動と活動のパターンの特色が明らかになった。
　また同協会に代表されるような宣教師派遣団体の設立に大きな影響を与えた福音主義者についても、トマス・クラークソンの反奴隷制運動の事例を検証した結果、同様のグローバルなミッション・ネットワークを利用した移動パターンがみられることがわかった。
③　イギリス植民地主義および反植民地主義の帝国植民地間における相関関係について、植民地教育政策に着目した。「英語教育」が反体制的現地人エリートを生み出したインドの経験と、エジプトにおける植民地支配の関係を事例として検証した。その結果、イギリスのインド経験はイギリス帝国植民地のみならず、インドシナや朝鮮といったフランスや日本等の他の帝国の植民地政策にも影響を与えていたとの結論にいたった。
　また、このイギリス植民地主義と対をなすイギリス領インドにおけるインド人による反植民地主義運動についても、同様に植民地や帝国の枠を超えて広まる越境的なものであることが判明した。

(2)　前項で述べたそれぞれの担当領域の成果を総括、検証した結果、19 世紀イギリス帝国におけるヒト移動とそのネットワークの様態とパターンについて共通してみられる特色は、以下の 3 点に集約できることが明らかになった。

①　従来もっぱら「本国―植民地」間の往来を中心に理解されてきたヒト移動およびヒト移動によって形成された帝国ネットワークの形成は、多様性と重層性を有し、かつ際立った活発な動きであった。
②　このヒト移動や帝国ネットワーク形成は、人びとの植民地経験や思想、諸制度・諸活動の伝搬という現象をもともなっていた。
③　これらの動きは帝国の版図内にとどまることなく、ときに非公式帝国を含めた「外国」まで及ぶほどの高い越境性を有していた。

　これらの結論はまた、本基金の支援によって平成 26 年 12 月に開催した公開ワークショップにおける、アジアを含めた広範な地域の移民・帝国史研究に携わる研究者との意見交換でも裏付けを得た。

　以上のような本研究の成果は、わが国のイギリス帝国史研究のさらなる展開に寄与するのみならず、同時期の複数の近代帝国―イギリス、フランス、ロシア、日本など―にみられる相互の「間帝国」関係に近年注目しつつある、国際的な帝国史研究にたいしても、新たな視角と可能性を提示しうる意義を持っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

①吉村（森本）真美、捨て子と帝国―ロンドン・ファウンドリング・ホスピタル、神戸女子大学文学部紀要、査読有、48、2015、43-57
②Satoshi Mizutani, Anti-Colonialism and the Contested Politics of Comparison: Rabindranath Tagore, Rash Behari Bose and Japanese colonialism in Korea in the inter-war period, Journal of Colonialism and Colonial History, 査読有, 16-1, 2015,html 形式
DOI: 10.1353/cch.2015.0005
③ Satoshi Mizutani, Hybridity and History : A Critical Reflection on Homi K. Bhabha's Post-Historical Thoughts, Ab Imperio: Studies of New Imperial History and Nationalism in the Post-Soviet Space, 査読無, 2013-4(2014), 27-48
DOI: 10.1353/imp.2013.0115
④森本（吉村）真美、世紀転換期以前のイギリス子ども移民―「子ども移民運動」前史の意、HALCYON - 4 (ハルシオン No. 4)、 世界子ども学研究会紀要、査読無、4 (2014)、1-8
⑤中沢（並河）葉子、イギリスにおける反奴隷制運動と女性、外国語研究（神戸市外国語大学）、査読無、85、2013、17-36

〔学会発表〕（計１７件）

①水谷智、児童隔離政策帝国内移動・移植―

20 世紀英領インドの「孤児院」事業の事例、世界子ども学研究会第 14 回例会、2015 年 3 月 27 日、神戸女子大学三宮教育センター（兵庫県・神戸市）
②Mami Yoshimura, Yoko Nakazawa, Satoshi Mizutani, Historical Workshop: Migration, Colonization, and Histories of the Nineteenth-Century World
2014 年 12 月 6 日　神戸研究学園都市 UNITY（兵庫県・神戸市）
　イギリス帝国史研究会との共催で、本課題の集成報告を含めた公開ワークショップを企画・主催した。アデル・ペリー教授（カナダ・マニトバ大学）、松田ヒロ子准教授（神戸学院大学）、藤川隆男教授（大阪大学大学院）をゲストスピーカーとして招聘し、カナダ、台湾、オーストラリアの事例報告を中心に、国際的視野にもとづく帝国史・移民史研究の展開と課題について議論した。
　吉村：Chief Organizer, Opening Remarks
　中沢：Organizer, Remarks
　水谷：Organizer, Chair
③Satoshi Mizutani, Egypt under British rule and the colonization of Korea: the Japanese politics of colonial comparison in the early twentieth century, The Politics of Colonial Comparison Workshop, 29 September 2014, All Souls College(Oxford, England),（招待講演）
④中沢（並河）葉子、反奴隷制運動のネットワークとメディア戦略、社会経済史学会近畿部会「大西洋奴隷貿易史研究の新地平―データベース、ネットワーク、アボリッションー」2014 年度夏季シンポジウム、2014 年 8 月 22 日、大阪市立大学文化交流センター(大阪府・大阪市)
⑤森本（吉村）真美、ヴィクトリア期イギリスの年少者移民―徒弟・囚人・里子、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 13 回全国大会、2013 年 11 月 9 日、甲南大学（兵庫県・神戸市）
⑥森本（吉村）真美、近代イギリスの子ども移民―概要と論点、世界子ども学研究会第 9 回例会、2013 年 9 月 21 日、青山学院大学（東京都・渋谷区）
⑦Yoko Namikawa, The Christian Missionary Activities and the Emergence of the Modern Family Idea in Early Meiji, the 2nd Congress of the Asian Association of World Historians, 28th, April, 2012, Ewha Woman's University,(Seoul, Korea)

〔図書〕（計６件）
①田辺明生・杉原 薫・脇村孝平編、水谷智他著、現代インド１　多様性社会の挑戦、東京大学出版会、2015、392
②板垣竜太、鄭昞旭編、水谷智他著、식민지라는 물음（植民地という問い）、소명출판、2014、567

〔その他〕
ホームページ等
　該当なし。
　なお、本課題は申請時においてはホームページ設置による成果公開を予定していたが、学術雑誌への掲載（英文）による議論提起の方が国際的に周知を得られ、国内外の学会への寄与もより大きいとの判断から、最終成果公開の方法を変更した。本報告書提出時点（2015 年 6 月）において、2016 年春に刊行予定の学術雑誌への成果掲載にむけて、必要作業を継続している。

６．研究組織
(1)研究代表者
　吉村　真美（森本真美）
（MORIMOTO-YOSHIMURA, Mami）
　神戸女子大学・文学部・准教授
　研究者番号：８０２６３１７７

(2)研究分担者
　中沢　葉子（並河葉子）
(NAMIKAWA-NAKAZAWA, Yoko)
　神戸市外国語大学・外国語学部・教授
　研究者番号：１０２９５７４３

　水谷　智（MIZUTANI, Satoshi）
　同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授
　研究者番号：９０４１１０７４
　（平成 26 年度から分担研究者）

　川村　朋貴（KAWAMURA, Tomotaka）
　富山大学・人文学部・准教授
　研究者番号：８０３７７２３３
（平成 24 年 11 月に辞退）

(3)連携研究者
　水谷　智（MIZUTANI, Satoshi）
　同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授
　研究者番号：９０４１１０７４
（平成 24―25 年度　26 年度は研究分担者）